

学位論文要旨

氏名：田昊

題目：日本語教育文法における「言いさし」の研究

本研究では、「日本語教育の役に立つ」文法研究（庵 2011a,2011b,2012）を目指し、「言いさし」を取り上げ、統語的・意味的・音韻的な面から、コーパスを使用して考察を行った上で学習者における知覚処理状況を明らかにすることを目的として実験、考察を行った。

本研究は、四つの部分に分けて展開している。第一部は「第 1 章」、「第 2 章」、および「第 3 章」からなり、第二部は「第 4 章」、「第 5 章」、「第 6 章」からなり、第三部は「第 7 章」、「第 8 章」、「第 9 章」の三章からなり、第四部は第 10 章である。各章の概要は、次の通りである。

第一部 本研究の前提

第 1 章 序論

日本語の話し言葉における「言いさし」の多用と日本語教育現場における「言いさし」の扱い方を述べ、本研究の動機と問題の所在を指摘し、研究目的及び課題を記述した上で、本研究の構成、概要、本研究の意義について述べる。

第 2 章 本研究における「言いさし」の捉え方

本研究の前提として、「言いさし」の捉え方、定義、範囲、分類、形成理由、文法論・意味論・音韻論における位置付けについて具体例をあげながら示す。具体的に、まず、先行研究をまとめた上で本研究における話し言葉の「文」について「構文的に陳述を担う述語または独立語 1 つを持ち、機能的に社会習慣によって完結性を有して言い切るもの」と定義した上で、「言いさし」を一つの独立文として考えることができることを述べる。それから、「言いさし」の形成要因を論じ、「言いさし」の文法論における位置付けを述べた上で、本研究の研究対象を明示する。

第 3 章 日本語教育文法と「言いさし」に関する先行研究

「日本語教育文法」及び「言いさし」に関する先行研究について述べる。具体的に、「日本語教育文法」に関する研究をまとめた後、まず、定義・機能に関する先行研究を明確にし、それから出現理由に関する先行研究を述べ、最後に、学習者における習得状況に関する先行研究をまとめる。

第二部 コーパスにおける「言いさし」の使用実態に関する考察

第 4 章 『名大会話コーパス』における「言いさし」の形態・統語・意味的な特徴

日本語における「言いさし」の「けど」類の統語的・意味的な使用実態を明らかにするために、『名大会話コーパス』を使用して考察を行う。その結果、「言いさし」の「けど」類は「主張を和らげる」「相手の反応を引き出す」という二つの発話機能を果たしていること、接続助詞の「けど」類に比べて「言いさし」の「けど」類のほうがより多く使われていること、「言いさし」の「けど」類と接続助詞の「けど」類はいずれも特定の述語に偏っているものの、前接語が違っていること、「言いさし」の「けど」類の中で、「言い終わり」の「けど」類が「言い残し」の「けど」類よりかなり使用頻度が高いことが明らかになった。さらに、「言いさし」の「けど」類は、教育現場で以前より扱われるようになってきたものの、文法項目としては取り上げられていないという現状があり、本章の結果から、「言いさし」を明示的に取り上げていない現在の日本語教育は見直す必要があるということがわかった。

第5章 現代中国語コーパスにおける中国語の「言いさし」の形態・統語・意味的な特徴

中国語における「言いさし」の「けど」類の使用実態を明らかにするために、日本語の会話文に使用された「けど」類による「言いさし」が、中国語において、同じ文脈でどのように扱われているかについて中国語のコーパスを使用して考察を行った。その結果、日本語の会話文についてまとめると、「言い終わり」と「言い残し」とは、ほぼ同じ頻度で使用された。次に、同じ文脈で使用された中国語の会話文を考察してみると、「けど」類による「言い残し」の場合は、「けど」類の代わりに、接続表

現を使用しない「省略型」及び接続表現を残す「省略型」の用例が多く見られた。一方、「けど」類による「言い終わり」の場合は、接続助詞を除いて内容だけを述べる以外、語気助詞「啊呢」を使用する例文も存在することが明らかになった。本章の結果から、中国人学習者に「言いさし」を教えるために、「言いさし」について学習者がどのように理解して知覚しているのかを解明する必要があるという示唆も得られた。

第6章 『日本語話し言葉コーパス』における「言いさし」の音声的な特徴

日本語における「言いさし」の「けど」類の音韻的な使用実態を明らかにするために、『日本語話し言葉コーパス』を使用して「けど」類の「言いさし」の音声的な特徴、接続助詞の「けど」類との音韻的な相違を考察した。その結果、(1) 話し言葉では、ある種のイントネーションが加わることによって文末に相当する切れ目が生じることがある(小磯 2008) ため、接続助詞の「けど」類は上昇下降調 (HL%)、「言いさし」の「けど」類は下降調 (L%) を伴うことが多いこと、(2) 「言いさし」の「けど」類の発話末に **final lowering** に相当する著しい下降が見られ、発話の終了を意味していること、(3) 対話の場合、終助詞「ネ」が付かない下降調 (L%) 及び上昇調 (H%) の発話において、「言いさし」機能を果たす「言いさし」の「けど」類は、接続助詞の「けど」類に比べてより長く、外れ値が多く存在する傾向が見られるが、それに対し、独話の場合は、下降調 (L%) の発話において対話の場合と同じであるが、上昇調 (H%) の発話において、対話と違い、接続助詞の「けど」類発話は、「言いさし」の「けど」類に比べてより長く、最終モーラ長に外れ値が多く存在することがわかった。以上のような要素は、発話の継続・終了を予

測するためのリソースとして、会話参加者に利用されている可能性が十分にあるといえよう。日本語教育の現場では、「言いさし」を導入する場合、それぞれの接続助詞で終わる言いさし表現の機能などを十分に考慮して音声面の指導にも配慮して指導していかなければならないと言えるだろう。

第三部 中国人日本語学習者に対する「言いさし」の認知処理状況に関する実験調査

第7章 中国人学習者における「言いさし」の視覚情報処理状況に関する調査

中国人学習者の統語的・意味的な知覚状況を明らかにするために、「言いさし」の「けど」類の理解状況を全体的に把握するための記述調査を実施するとともに、アンケートでは捉えきれない学習者の個別的な側面を補完するためにフォローアップ・インタビュー調査を実施した。その結果、学習者は「言いさし」の「けど」類に対し、「実質な意味がない」という認識を持っており、接続助詞と「言いさし」の混同および母語からの「負の転移」が見られた。それを踏まえ、今後の日本語教育において、中国語のコミュニケーションの特徴と対照しながら文型練習・会話練習を行い、教室活動から日本語の特徴的なコミュニケーションに触れ、理解の手がかりについても学習者に実感させ、気づかせる能力を育成する必要があるということを指摘した。

第8章 中国語母語話者が母語での「言いさし」の認知・産出状況に関する調査

中国語及び日本語の両言語使用者による具体的なコミュニケーション場面における「言いさし」の知覚・使用状況の相違を明らかにするために、中国語と日本語とそれぞれの言語で談話完成テストを実施した。その結果、(1)「言いさし」は、断りの理由表現のマーカーとして頻繁に使用され、中国語における使用頻度が日本語より高いこと、(2)日本語母語話者は「上下関係」及び「親疎関係」に、中国語母語話者は「親疎関係」に敏感に反応すること、(3)中国語では「誘い」を断る行為は「依頼」を断る行為より「言いさし」が多用され、日本語では「依頼」を断る行為は「誘い」を断る行為より「言いさし」が多用されることがわかった。最後に、形態を重視して形態的な標識が豊かな日本語と語順を重視して形態的標識に乏しい中国語の特徴をまとめ、中国語において「無標識従属節」の「言いさし」は「標識従属節」より丁寧で多用される傾向にあることを論じた。それを踏まえ、「言いさし」を導入する際には、円滑なコミュニケーションを図るための1つのポライトネス・ストラテジーとして、「言いさし」を学習者に認識させる必要があるということを述べた。

第9章 中国人学習者における「言いさし」の聴覚情報処理に関する実験

中国人日本語学習者における「言いさし」の「けど」類の音韻的な知覚状況を明らかにするために、音声聴取実験を実施し、「言いさし」の音韻的な知覚状況、接続助詞の「けど」類・「言いさし」の「けど」類に対する知覚のモードと知覚のカテゴリー境界の解明を行った。日本語母語話者の結果を見ると、まずF0値は低くなるほど終了と判断される確率が高まる。また、発話の最終モーラ長が長いほど終了と判断される確率が高まる。句末の音調については、上昇成分を伴うBPMの場合に継続と判断される確率が高まり、下降調の場合に終了と判断される確率が高ま

ることがわかると言える。この結果は、第6章で見えてきた傾向と一致しており、日本語母語話者はこうした特徴を利用しながら継続か終了かを判断していることが示唆される。一方、中国人学習者は、日本国内か中国国内か、上級か初級か、どの学習環境・学習レベルにおいても、発話末のモーラ長を発話の終了・継続の判断にほとんど用いていないことが示唆された。さらに、母語からの転移がみられること、習得上における「過剰般化」がみられること、日本語学習者のレベルが上がっても知覚状況は日本語母語話者と相違があった。これらの結果から、日本語教育における「けど」類の音声的な指導は、聞き方の指導、「予期」する能力の養成、自然発話の産出に力を入れるべきであるということを提案した。

第四部 本研究のまとめ

第10章 結論および日本語教育への示唆

最後に、第四部（第10章）は、全体のまとめと今後の課題について述べた。本研究の調査・実験により、「言いさし」の「けど」類は、意味論的に「主張を和らげる」「相手の反応を引き出す」という機能を果たすこと、統語論的に否定形の「思わない」「よくない」「分からない」「知らない」とより多く共起すること、また、音韻論的に句末音調が下降調だったり、あるいはF0値の急激な下降を伴ったり、発話末の延伸を伴ったりすることが見られた。しかし、中国人学習者は、日本国内か中国国内か、上級か初級か、どの学習環境・学習レベルにおいても、発話末のモーラ長を発話の終了・継続の判断にほとんど用いていないことが示唆された。このような知見は、二種類の「けど」類の判別および「言いさし」に関する産出のための記述を考える手がかりを与えることができることを述べた。その後、残された課題をまとめた。